

# 連載 関係からみた子どもの こころと育ち

小林 隆児 Kobayashi Ryuji 大正大学人間学部臨床心理学科教授

第3回

今の親子関係は過去の親子関係を映し出す



## アンビバレンス関係をからみてゆく

前回(小誌2月号), ある乳児を例に, 養育者に対して甘えたくても甘えられないという「アンビバレンス」を取り上げたが, それはなぜ起こるのであるのか。

甘えのアンビバレンスは, 知覚過敏という子どもの特性ゆえの, 生来的な生物学的脆弱性としてこれまで位置づけられてきたように思う。しかし, 子どもと養育者との関係という視点から捉えていくと, さほど単純なことではないことがわかってくる。

SSP (新奇場面法)での母子の関わり合いのなかで筆者が特に注目したのは, 母親がST(ストレンジャー)の前でB男に挨拶を促してはB男の頭を撫で, 再会時にもB男を抱きながらさかんに頭を撫でていたことである。母親のSTに対する過度な気遣いと, まるで何かよいことをしたB男を褒めるような対応が, この場ではどこか不自然な感じを受けたのである。通常であれば, 再会時, 母親は泣いている子どもを抱きながら, よしよしとあやすのではないかと想像されるのだが, なぜこのとき母親はこのような対応をとったのであろうか。

## 褒めることとあやすこと

頭を撫でるという行為は, 子どもが(親からみて)好ましい行動をとったときに褒めるもので, 社会的意味合いの強いものだが, 泣いている子どもをあやすのは, 不快な情動を穏やかなものへと変えていくという本能的なものに近い。泣いている子どもを無条件に, それでいいんだよと受け止めることによって, そこで初めて子どもの不快な情動は穏やかになっていく。SSP (Strange Situation Procedure, 新奇場面法)での母親の対応をみると, B男がぐずったり泣いたりしているのを無条件に受け止めることが, なぜか母親にはむずかしいことがわかる。

## 母子ともに顕著に認められるアンビバレンス

B男のアンビバレンスは母子の関わり合いの場面で, ささまざまな形で顔を出している。例えば, むずがるときのB男の様子をみると, 本当は母親の乳房を求めているのであろうが, 実際には母親の肌に直接触れず, 洋服の上から母親のおなかをさかんに触っている。SSPでもみられたが, 甘えて母親に抱かれたがっても, いざ母親が抱くと, 半身の姿勢で互いが密着するのを避け, B男の関心はすぐに周りの玩具に移ってしまう。こんなときの母親の様子はどうかといえば, 母親は泣いているB男を抱くと, B男の顔を不安げに覗き込もうとし, 主治医と話したい様子で, 母親の関心はすぐに子どもから離れてしまう。このように一見する

とB男に特徴的とみえたアンビバレンスを、母子双方の関係の問題として捉えなければならないことがわかる。

実際、母親にもさまざまなかたちでアンビバレンスが認められる。たとえば、支援開始時には、母親は子どもと視線が合わない、なつかないことなどを心配して受診しているが、いざ子どもが自分にまわりつき始めると、自分のやりたいことができなくなるのではという不安が強まり、早くひとりで遊べるようになってほしいという気持ちも強まって、1歳前には断乳と離乳食を開始している。母親には子どもと繋がり合いたいという思いもあるが、それによって自分がなくなるのではという不安も同居している。アンビバレンスの特徴がここに端的に示されている。

## アンビバレンスと関係障壁

以上からわかるように、アンビバレンスはけっして子どもの特性といった「個」の問題として捉えることはできない。母子双方のアンビバレンスが両者の関係を難しくし、そこに負の循環を生んでいる。両者のアンビバレンスは互いに増強するように作用し合いながら関係が展開している。関係障壁という視点の重要性を強調するゆえんである。

生きていくために、乳児は養育者に全面的に依存しなければならぬ。しかし、養育者は誰でも子どもの依存欲求(甘え)を無条件に受け止めることができるかといえばそうではない。養育者自身はこれまでに少なからず、親になることをめぐる問題、世代間や夫婦間の軋轢など、さまざまなつらい経験をしてきているものである。自分の甘えをどのように受け止めてもらってきたか、そのような事柄が、養育者自身の子どもの甘えに対応する際に、さまざまな形で顔を出す。親は自分が育てられたように子どもを育てやすいのだ。

## AAI

子ども時代のアタッチメント体験を、大人になった時点で捉えるための面接がある。Mainら<sup>1)</sup>の開発したアダルト・アタッチメント・インタビュー(Adult Attachment Interview: AAI)である。いわば乳幼児に実施するSSPの大人版である。

AAIは半構造化された面接法で、子どもの頃の親子間の経験が、今の自分にどのような影響を及ぼしているかを振り返ってもらう。被虐待体験をもつ大人を想定した面接であるため、被虐待

体験にまつわる質問が多いが、両親について回想してもらう際に、両親の人物像ではなく、両親との関係そのものに焦点を当てて、「できるだけ小さい頃から始めて、お母さん(お父さん)との関係を表すような形容詞やことばなどを5つあげてください」といった質問をする。過去の親子関係の質について尋ねている。

AAIを実施してみると、このような質問にすぐに答えるのは誰にとっても容易なことではないことがわかる。親子関係の質を想起しようとする、親子間に流れていた気持ちが甦ってくるからである。そのため、そのような気持ちの交流にさまざまな問題を抱えていた人にとってはなかなかつらい面接である。したがって、AAIを実施するためにはかなり厳しい練習が課せられている。面接によって、時に混乱をきたした被面接者への対応能力も必要とされているからである。

ただし、AAIでは過去の被虐待体験の有無そのもののみを問題としてはいない。内容の分析で重視されているのは、語られた内容そのものよりもそれがどのように語られたか、その語りの性質である。アタッチメントにかかわる体験の内容が肯定的か否定的かといった評価が重要なのではなく、それを現時点で一貫したまとまりをもって語ることでできるかが重要だというのである。SSPでは、子どもの養育者に対する直接的な接近行動のありようを評価しているが、AAIでは現在思い浮かべている親に対してどのようなスタンスをとっているかをみている。親に対してとるスタンスの質は、その人の対人関係の質を強く規定しているとされ、内的作業モデルともいわれている。

なお、AAIで認められるアタッチメント・タイプは表1のように分類され、SSPのタイプとの強い関連が指摘されている。

## 母親にみられる子ども時代のアタッチメント体験

B男の母親は、過去の自分と母親との関係について、先の質問で以下の5つのことばで表現した。すなわち、「寂しかった」「あまりかまってもらえなかった」「甘えられなかった」「言うことをかなえてくれた」「優しくかった」である。特に、「寂しかった」「あまりかまってもらえなかった」「甘えられなかった」と表現した体験について、具体的に以下のように語っている。

「鍵っ子だったから家に帰ったら…誰もいなかった。うちの母親はすぐくずばらなところがあった。以前もそうだったけど、今でも実家に帰ると(そう思っちゃいけないんだけど)、すぐイライラすることがある。母親も働いていたし、弟もいたので大変だっ

表1 AAIによって分類される各アタッチメント・タイプの行動特徴

AAIのアタッチメント・タイプ	特徴	強い関連性をもつ SSP のタイプ
アタッチメント軽視(拒絶)型 (dismissing/detached type)	自分の人生におけるアタッチメント関係の重要性や影響力を低く評価するタイプ。表面的には自分の親のことを理想化し、肯定的に評価したりするが、親との具体的な相互作用やエピソードについてはほとんど語る事がなく、潜在的に、親あるいは他者との親密な関係を避けようとしていることがうかがわれる。	Aタイプ(回避型)
安定自律型 (secure autonomous type)	過去のアタッチメント関係が自分の人生や現在のパーソナリティに対してもつ意味を深く理解しているタイプ。自分のそれまでのアタッチメント関係の歴史を、肯定的な面と否定的な面を併せて、整合一貫した形で語る事ができる。他者および自分を深く信頼しており、対人関係は全般的に安定している。	Bタイプ(安定型)
とらわれ(纏綿)型 (preoccupied/enmeshed type)	自分のアタッチメント関係の歴史を首尾一貫した形で語る事ができず(語る内容に矛盾が認められ)、自分の過去、特に親が自分に対してとった態度などに未だ強いこだわりをもっている(深くとらわれている)タイプ。自分の親について語るときに激しい怒りを示すことがある。他者との親密な関係を強く切望する一方で、自分が嫌われているのではないかと、見捨てられるのではないかと不安を抱いており、対人関係は全般的に不安定なものになりがちである。	Cタイプ(アンビバレント型)
未解決型 (unresolved type)	過去にアタッチメント対象の喪失や被虐待などのトラウマ体験を有し、それに対して未だに葛藤した感情を抱いている(心理的に解決できない)、あるいは「喪(mourning)」の過程から完全に抜け出していないタイプ。時に発話のなかに非現実的な内容が入り交じる(例えば、死んでしまった人がまだ生きてるように話すなど)ことがある。	Dタイプ(無秩序・無方向型)

(参照文献: アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する。数井みゆき・遠藤利彦・編。アタッチメントと臨床領域。ミネルヴァ書房、京都、2007、p.30。より引用・一部改変)

〈参考〉 各アタッチメント・タイプの行動特徴

SSPのアタッチメント・タイプ	SSP における子どもの行動特徴
Aタイプ(回避型)	養育者との分離に際し、泣いたり混乱を示すということがほとんどない。再会時には、養育者から目をそらしたり、明らかに養育者を避けようとしたりする行動がみられる。養育者が抱っこしようとしても子どものほうから抱きつくことはなく、養育者が抱っこするのをやめてもそれに対して抵抗を示したりはしない。養育者を安全基地として実験室内の探索を行うことがあまりみられない(養育者とはかかわりなく行動することが相対的に多い)。
Bタイプ(安定型)	分離時に多少の泣きや混乱を示すが、養育者との再会時には積極的な身体接触を求め、容易に静穏化する。実験全般にわたって養育者や実験者には肯定的感情や態度をみせることが多く、養育者との分離時にも実験者からの慰めを受け入れることができる。また、養育者を安全基地として、積極的に探索活動を行うことができる。
Cタイプ(アンビバレント型)	分離時に非常に強い不安や混乱を示す。再会時には養育者に身体接触を求めていくが、その一方で怒りながら養育者を激しく叩いたりする(近接と怒りに満ちた抵抗という両面的な側面が認められる)。全般的に行動が不安定で随所に用心深い態度がみられ、養育者を安全基地として、安心して探索活動を行うことがあまりない(養育者に執拗にくっついていようとするものが相対的に多い)。
Dタイプ(無秩序・無方向型)	近接と回避という本来ならば両立しない行動が同時(たとえば顔をそむけながら養育者に近づこうとする)に、あるいは離時的(例えば養育者にしがみついたかと思うとすぐに床に倒れ込んだりする)にみられる。また、不自然にぎこちない動きを示したり、タイミングのずれた場違いな行動や表情をみせたりする。さらに、突然すくんでしまったりうつろな表情を浮かべつつじっと固まって動かなくなったりするようなどことがある。総じてどこへ行きたいのか、何をしたいのかが読みづらい。時折、養育者の存在におびえているような素振りやみせることがあり、むしろ初めて出会う実験者などにより自然で親しげな態度をとるようなことも少なくない。

(参照文献: アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する。数井みゆき・遠藤利彦・編。アタッチメントと臨床領域。ミネルヴァ書房、京都、2007、p.22。より引用・一部改変)

たとは思いますが。当時とても嫌だったのが保育園に行くにお弁当をちゃんと作ってくれなかったこと。おかずが1つしか入ってなかったりした。だからみんなの前で(弁当を)開けるのが嫌だった。でもそういうことは母親に言えなかった。「弟に手がかり、歩くのも遅かったので、家族一緒に出かけても私はもう歩けるから抱っこしてもらえなかった」などと回想しながら、涙を流すのである。その一方で「言うことをかなえてくれた」「優しくかった」とも表現し、物質的にはいろいろと自分の要求に応じてくれたことを言い添えている。未だ自分の母親との間ではアンビバレントな気持ちが生々しい形で残っていることを感じとれる内容である。したがって、B男を出産して母親になったが、実家に帰っても自分の親には気を遣い、親の前でゆったりとした気持ちになれないのである。親との関係について回避的で、未だにその思いに囚われている。AAIをとおして、自分の子ども時代に母親にほとんど甘えることができなかつたこと、さらには母親の期待に応じて褒められたときだけ自分は認めてもらっていると感じていたことが明らかになってきたのである。表1では、典型例ではな

いが「アタッチメント軽視型」ないし「とらわれ型」に近い。

## 今の親子関係は過去の親子関係を映し出す

以上の母親自身の親子関係の想起内容から、SSPで母親がB男の頭をさかんに撫でていたという行動の意味がしだいに浮かび上がってくる。つまり、過去の子どもの時代の母子関係(母親の期待に応じて褒められていたこと)が、SSPで生々しく再現されているということである。B男が子ども時代の自身の姿として映し出され、母親自身は過去の自分の母親の姿を演じている。このように今の親子関係は、時に親自身の子どもの時代の親子関係を生々しい形で映し出すものなのである。

### ◎文 献◎

- 1) George C. Kaplan N and Main M: Adult attachment interview. Unpublished manuscript, Department of Psychology, University of California, Berkeley, 3rd ed, 1996. (数井みゆき, 他訳: 成人愛着面接インタビュープロトコル, 1998.)

## ●第26回 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会●

■テーマ: 「次の四半世紀の始まり」

■会 期: 2009年5月30日(土), 31日(日)

■会 場: 九州大学医学部百年講堂

(〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1 TEL: 092-642-6257)

■会 長: 岡田賢司(国立病院機構福岡病院小児科)

### ■プログラム

#### ●特別講演

西間三登(日本アレルギー学会理事長)

#### ●シンポジウム

- ①「食物アレルギーの正しい理解と対応—食物アレルギーの克服に向けて—」
- ②「小児気管支喘息治療・管理ガイドライン2008の改訂要点」
- ③「難治アレルギー疾患児の教育上の配慮事項—就学指導では、小・中・特別支援学校では、担任・擁護教諭

は…～」

④「初めて刊行された「患者さんとその家族のためのぜんそくハンドブック2008」」

■主 催: 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会

■共 催: 財団法人 日本アレルギー協会

### ■事務局

国立病院機構福岡病院小児科(本村知華子, 手塚純一郎)

〒811-1394 福岡市南区屋形原4-39-1

TEL: 092-565-5534(病院代表)

FAX: 092-566-0702(病院代表)

e-mail: nanchi26@mfukuoka2.hosp.go.jp

学会ホームページ: <http://kyushu.seikyoku.ne.jp/kyushu-u/nanchi26/index.html>

日本小児科学会専門医点数: 5点, 日本アレルギー学会専門

医点数: 4点(発表者+3点)